仮性動脈瘤および動静脈瘻合併の 1 症例

◎遠藤 知穂[1)]、細谷 栄一[1)]、富田 和俊[1)]、鈴木 智美[1)]、清野 佳代[1)]、高梨 恵実[1)]
公立学校共済組合東北中央病院[1)]

【はじめに】心臓カテーテル検査後、穿刺部位の左橈骨動脈に仮性動脈瘤および動静脈瘻を合併した症例を経験したので報告する。【症例】84 歳女性。経皮的冠動脈インターベンション後の再評価目的で入院し、左橈骨動脈より心臓カテーテル検査施行した。翌日穿刺部の圧迫解除直後は異常なかったが、約 2 時間後穿刺部周囲の疼痛を訴え穿刺部より中枢側前腕に皮下出血と腫脹を認めた。すぐに穿刺部を圧迫した。翌日超音波検査を施行したところ、穿刺部付近の左橈骨動脈に接して内部に無エコー域を伴う低～等輝度の混合エコーを呈する腫瘤像を認めた。大きさは 48×22㎜だった。橈骨動脈から腫瘤内部の無エコー域に to and fro を呈する高速血流信号を認めたことより仮性動脈瘤が疑われた。止血のためプローブによる圧迫を 10 分間行ったところ、血腫の無エコー域は縮小、低輝度エコーに変化し、血流の流入は認められなくなった。4 日後血腫内部に血流信号を認めないが、血腫付近の橈骨静脈内に拍動波を示す血流を検出した。仮性動脈瘤は血栓化し、動静脈間にモザイク血流と約 1 ㎜瘻孔、静脈径 2 ㎜の拡張を認めたため動静脈瘻と示唆された。また瘻孔付近の橈骨動脈の内膜に 1.4㎜の肥厚を認めた。瘻孔付近を圧迫したが閉鎖せず、翌日変化がないため退院となった。13 日後の超音波検査では、血腫はやや縮小し低～等輝度エコーの内部不均一なエコー像となった。瘻孔は 1㎜以下とやや縮小がみられた。さらに約 1 ヵ月半後の診察では、聴診にて雑音が聴取されたため動静脈瘻は残存していると思われた。無症状であったため経過観察となった。【考察】心臓カテーテル検査後、穿刺部位の左橈骨動脈に仮性動脈瘤および動静脈瘻を合併した症例を経験した。仮性動脈瘤はリアルタイムで観察しながらプローブで高速血流を圧迫し止血することができた。直接プローブで観察しながら治療できた症例であった。仮性動脈瘤の経過観察中に動静脈瘻が検出されたが、穿刺部位に様々な合併症を併発することを念頭においた観察がより重要だと思われた症例であった。カテーテル検査の穿刺部に起こる医原性合併症について日頃から学び描出する技術のレベルアップが必要である。

連絡先：023-623-5111